

## 岡林滋樹氏のこと

本 田 実\*

本誌 1978年6月号 168頁雑報欄に、“ある発見——岡林メダルのこと——”という記事がある、大阪府下吹田の市立豊津中学校で、学区改編のため校内整理をしていたら、日本天文学会の「天体発見賞」2個と、米国大平洋天文学会の「ドノホーメダル」1個が発見されたが刻まれた名前が岡林滋樹となっており散逸のおそれもあるので、本来の所有者または身内の方にお返したいとのことであった、関係者が奔走の結果、岡林滋樹氏はすでに大東亜戦争で戦死されていたのが判明したがご遺族の方にこのメダルをお返しすることができたという記事である。

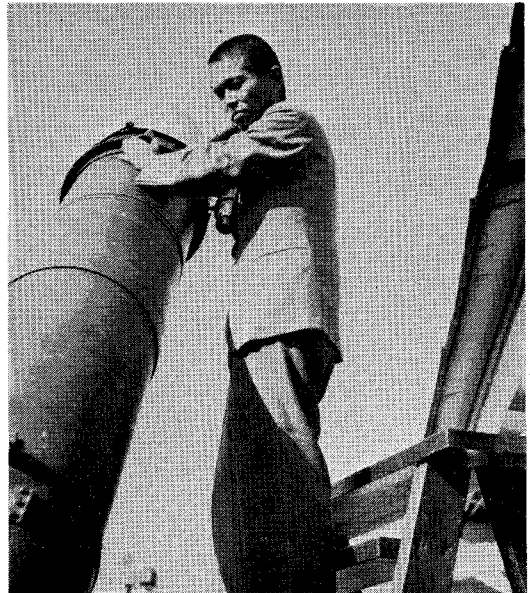
ここでいささか生前の岡林氏にかかわりを持った者として岡林氏のことを記してみたいと思う。

天文月報第29巻11号195頁雑報—射手座新星—。去る10月4日(1936年)午後7時神戸市灘区国玉通の岡林滋樹君は射手座に5等星を発見した旨、翌日午前9時東京天文台宛に電報で報ぜられた。

天文台では全国各地の観測者にその事実の確定方を依頼すると共にコペンハーゲンへも其旨打電した。(当時天文電報中央局はコペンハーゲンにあった、現在はスミソニアン天文台)、当時全国的に天候悪く北海道方面のみ晴れており、札幌の福島久雄君は5日夕僅かに同星らしいものを認め、更に6日夕確実に光度6等の新星の出現を確めて7日朝東京天文台へ打電された。8日に至り、コペンハーゲンからも電報があり、ヨハネスブルグのジャクソンは同新星を確定、6日に6等と観測し位置も通知してきた。

7日には札幌にて観測、8日以後は上諏訪其他に於て観測された。三鷹では13日夕まで全く観測の機会がなかった。4日発見当時は4.5等8日より11日まで6等半、13、14日には約7等半、下旬には8等まで減光した模様である。岡林君は本年6月五味君の新星発見に刺激され、銀河附近の星座を5等星位まで星の配置を暗記する事に努め、発見当日は変光星射手座W星を観測の後附近の星を注意して見馴れぬ星の存在に気付いたものである。発見者の平常の努力の賜で、岡林君のため又学界のため誠に喜ばしい次第である。

射手座新星の位置は赤経18時4分33.4秒、赤緯南34度21.1分(1936.0)で、射手座 $\epsilon$ 、 $\eta$ の二星と正三角形に近い位置にある。コルドバ星表南34度12514番



倉敷天文台 32cm カルパー鏡と岡林氏(昭和15年)

なる10等星の僅かに西北にある。この位置は歐洲では一般に観測不可能、日本でも南方地平線に近いためよく晴れた夜でなければ見えないから観測しうる機会が少ない。晴天の場合にはなるべく丁寧に光度を観測し報告されたい。蝘蟴座、鷲座(2個)射手座の4個の新星が引続いて出現し真中二個は日本に於て発見された事は我国のため誠に喜ばしい事である。目下—昨年出現のヘルクス座新星は7等前後、蝘蟴座新星は8等半内外である。(神田)

これよりさき昭和11年10月9日の東京朝日新聞全国版は次のように報じた。

——も一つ新星——英国天文台長と先陣を競ふ  
神戸のアマチュア

(大阪電話)我が無名の一アマチュア天文家の手でまた一つの新星が発見され然もこの新星発見をめぐって国際天文学会の先陣争いが演ぜられようとして居る。新星の発見者は神戸市灘区国玉通り二丁目のアマチュア研究家岡林滋樹君で去る4日夕刻愛用の望遠鏡を覗いて南西の方射手座星の中に4等半位の光度で僅かに輝く見慣れぬ星を発見したというのだがこの旨直ちに京大山本博士の許へ報告した、これが同博士の許に届いたのが7日のこと、山本博士は直接京大天文台で新星を確めるべく努めたが同夕折悪しく曇天でキャッチ

\* 倉敷天文台 M. Honda

出来なかったところ、8日午前11時頃南阿ケープタウンの英国国立天文台長ジャクソン氏から電報が配達され、去る6日夕刻経度18度4分半、緯度南34度21分の方向に6等星を発見した、とのこと、ジャクソン氏が発見したという新星の方向も岡林君がそれより二日前にキャッチした新星も略同じ方向なので、これにより岡林君の新星キャッチは明らかに証明された訳だが、一方この手続如何によっては折角の発見も英国人にしてやられることになるので、山本博士は大いに狼狽早速岡林君に会って発見当時の様子を聴取し発見の手柄を日本人の手に帰すべく直ちに学界の手続を取ることになった。

昭和11年(1936)10月9日大阪朝日新聞

果してこれも新星

半信半疑だった神戸の岡林青年

山本博士が“新発見”と折紙

夕刊既報—南阿ケープタウンのイギリス国立天文台長ジャクソン博士と新星発見の先陣争いをはじめた神戸中央職業紹介所勤務岡林滋樹君(24年)は8日夜京大花山天文台長山本一清博士に招致され京都三条青年会館で会見、発見当時の模様を詳細に報告の結果同君の発見したものとジャクソン博士の発見したものと全く同じ星と判明凱歌は明らかに同青年にあることが確認されるにいたったので、山本博士は同夜直に国際中央局である、コペンハーゲンのデンマークの国立天文台に手続を取った。今回の発見は、ジ博士より二日早い4日午後7時ごろのことで、4.5等もある星が肉眼で見えたこととて同君自身も、山本博士に会うまで果してこれが新星であるか否か半信半疑であったとのことである。

なお花山天文台でも8日夜総動員で新星の観測を行ったが新星はすでに西天に近く光度も6.2ないし6.3等に減じ肉眼では観測困難の状態であった。

天文月報第29巻第12号、雑報215頁

◎射手座新星発見当時の概況

10月20日付にて東京天文台福見氏宛発見者岡林滋樹氏より標記の件につき左の通り報告があった。

前略…「10月4日の晩は良く晴れていましたので星を見様として二階の廊下に出ました。7時少し前でしたがすぐ目に入ったのは射手座の星屑でした。W星が見えはしまいかと(普通の天気の場合はこの星は見えないのですがその時は特に恵まれた好晴だったから左様に思ったのです)瞳を凝すとはっきり見えます。コンデションが逃へ向でしたから他の星をと少し下方に凝視すると射手座の $\gamma$ 星と $\eta$ 星とを結んだ線の $\eta$ 星の方へ約三分の一の所へ見慣れぬ星を見出しました。時刻を見るため急いで階下へ、そうしてそれが新しい星

かどうかを確かめるべく椽側に立った時丁度七時のサイレンが鳴りました。

急いで手許の古賀恒星図を展げて調べましたがその位置にそれらしい星はありません、尚ほ念のため新選恒星図と比較して見ていよいよそれが新星であることを確めた上直ちに星図の上でその大体の位置を決め、次いで近傍の適当な星を捜して光度の観測をしました。発見当時の光度は約4.5等でした。

8時頃になると星が傾いてもう充分光度の観測が出来なくなりましたから私は翌夜を待つ事にし、天文台へ電報を打つ手筈を採りましたが、時間外で郵便局が締っていたので止むなく翌5日朝8時頃に東京天文台へ打電致しました。その翌日から天候が悪く私はずっと星の観測が出来ずただ他からの発見の知らせを待っていたのです」。

同じ天文月報第29巻第12号203頁論叢という欄の「最近出現の新星及び彗星に就いて」という、神田茂氏の8頁にわたる論文の中に、岡林氏の手記の一部が載せられているので上記の福見氏宛の文章と重複する点もあるが興味が深いので次に記すことにする。

「10月4日はまことに好い天気でした。この実に稀な程に良く晴れた天候は私をして近頃少し怠け味の星に對す憧憬をそそりまして、日が暮れて丁度5時50分でしたかろうか、夕食を終えると私はすぐに二階に上って南に面する椽側に立ちました空は磨き立てた様に澄み渡ってしまして、5等位の星なら容易にその位置を指さすことが出来ました。とすぐに私は射手座のW星が見えはしまいかと思ったのでした。実はこの夏のW星の変光の状態を肉眼で観測しようとしたのですが、どうも夏の空の状態では肉眼観測は困難でしたので中止したのでした。この時にこのW星とその附近の微光星は鮮に見ることが出来ました。次の瞬間には「新しい星が……」と思っていました。今夏6月蝸蝸座に現れた新星発見の報知、而もそれが日本人よっての発見、五味一明様の発見は確かに私を感奮させました、で可成り暇のある度に私は銀河附近の星座を5等星位までの星を暗記する事に努めていました。ですから「新しい星が現れてしまいか」という観念は直ぐ私をして目を其のW星附近の星にうつさせたのです。と、 $\gamma$ 星と $\eta$ 星を結んだ線のほぼ中間に見なれぬ星を見出さしめたのです。「あんなところに、こんな星は無かった筈だが」と思うとすぐ私は時刻を見るために、下に下りまして、又二階に上ってもう一度窺い様としました。丁度その時に7時のサイレンが鳴りました。それが新しい星であるだろうと思うと手許の古賀恒星図とを対照して見ましたが、いづれもその位置にそれらしいものはありませんので、いよいよ新星で

あると思いました。そうして直ぐに光度の観測を初めましたが、其頃に丁度射手座附近に断雲が、かかりましたので、30分間位手をつかねていましたその中に段々時刻がたって、この星が次第に傾いて行きますと、それが私の家の方向から見ると町の燈火の反映した空に沈んで行きますので、益々見難いものとなって行き、光度の比較が大部困難でした。

で星の色を見ることなんかすっかり忘れていました。こうして星が見えなくなると、私はすぐに天文台に電報を打とうと思いましたので、星図の上で其の大体の位置を出したのでした。電報を打ちに行った時已に9時半を過ぎていましたので局はしまっていました。もう今夜は星も沈んで仕舞ったのだしするからと思って、10月5日の朝電報で東京天文台へお通知したわけなので御座います。

岡林滋樹(1913~1945)は大正2年2月21日、広島県佐伯郡飛渡瀬村卒大停において、父岡林廣治(1884~1943)、母タキノ(1890~1961)の次男として生れた。長男春樹、長女節枝、次女カズエ、三男潤樹、四男英樹の6人兄弟の次男であった。小学校は、広島市三篠尋常小学校、中学は大阪市の、ミッションスクールで、私立桃山中学校、大学は、関西学院大学哲学科に学んだが家庭の都合で中途退学した。

父は生命保険会社の社員で転勤が多く、桃山中学の頃は、兵庫県西宮市に住み、両親兄弟三人、妹二人の8人と、お手伝いさんを置く中級の生活で、友人、父の来客等で、いつもにぎやかな笑声に満ちた家庭生活であった。滋樹の一番幸な頃であったろう。

滋樹がいつごろから星が好きになったのかよく分らない。はっきり分らないけれども小学校高学年か中学の初期であろう、数冊のスクラップブックが残されているが1927年出現のウインネケ彗星の新聞記事から天文記事が美しくレイアウトされて貼られている、1927年といえ、昭和2年である、かりにこの年から星が好きになったとしても満14才である。

星が好きになって望遠鏡がほしくなった。あとで思えば望遠鏡がほしくなっていたのであるが、急に家庭の中でアルバイトが始まった、拭き掃除、ガラス磨き、小さい弟のお守、走り遣い、邪魔をしているのか手伝っているのか判らないようなアルバイトがつづいて小遣いをせせと貯め出したのである。そしてある日突然望遠鏡が送られてきてその目的を知ることができた。口径6.5cmのオレンジ色に塗られた屈折望遠鏡で、1927年の秋も深い頃であった。1928年1月から太陽黒点の連続観測をはじめた。1933年1月太陽観測中サングラスを破って目を

痛めた、観測は中止せざるを得なかった。

1933年12月20日、夕方の空に金星と土星が相ついで掩蔽される食があった。6.5cmの屈折望遠鏡はこの食を見事に写し出してくれた。金星が月に潜入しやがて出現した、次は土星潜入した出現した現象は、月が地平に近づいても青白く澄んで見事に観測できたのは空気が上々に澄んでいたためだったと、夜半になって天候がくずれ翌21日は雪の朝だったと手記を残している。

当時すでに、東京に日本天文学会があり、京都に、山本一清博士が率いる天文同好会(後に東亜天文協会)があった、岡林滋樹は1936年の射手座新星を発見するまでそのどちらにも入会していなかった。新星を発見して東京天文台の神田茂氏と交流があるようになって、神田氏から、岡林に当てた手紙を見ると、前文略——貴名は日本天文学会の名簿には見えません様ですが、然し変光星に関することはよく御諒解の様、ご報告で拝見しました——後略——。(1936年10月9日付)

山本一清博士とのつながりをつくったのも——はじめに当時の新聞の記事をのせたが——この新星であった。

関西学院大学を中退した滋樹は、三菱重工業に就職していた、昭和10年より14年のはじめまでである。

昭和13年夏、当時倉敷天文台で変光星の研究をしていた小山秋雄氏が逝去した。

山本博士は、射手座新星の発見者で輝かしい業績を上げた岡林滋樹に小山氏の後任として倉敷へ移ることを希望した、何回かの手紙のやりとりや、電話や実際に出会っての話し合いの結果、ついに1939年2月彼は三菱の職を離れて倉敷の地を踏んだのであった。

倉敷天文台は、1926年11月倉敷市の素封家原澄治(1878年~1968年)の出資によって、山本一清氏を中心とした天文同好会が英国より、カルパー32cmの反射赤道儀を購入して設立した天文台であった。

倉敷へ移って早速その4月23日、ペルセウス座に、4等級の新彗星1939dを肉眼で発見したがこれはおしくも1週間前に外国で発見されていて第一発見者になれなかった。ついでその年の11月に、1939nを独立発見したがこれもおしくもフレンド氏に先を越されたのであった。

1940年10月1日、倉敷の空は前日から高気圧の圏内であって美しく晴れ上がった。天文台の構内はコスモスの花が咲き乱れて、オットー3吋の屈折を載せて観測する木製の観測台の近くで風にゆれていた。オットー3吋の屈折望遠鏡は、当時輸入望遠鏡を一手にあついていた鳥取市の大坪雄太郎氏から原澄治氏が購入していたもので滋樹は、彗星捜索用にもっぱらこれを愛用していた。午前3時に起き出して東天の掃索をはじめた、時間が暁に近づくにしたがって、しし座がせり上ってきてレグルスが横に動かすオットーの視野の中を右から左へ

横切っていった。そのあと小さい核を星雲体が包んだ直径5分ばかりの天体が視野に入ってきた、1940e 岡林彗星との最初の出逢いであった、岡林滋樹以前に誰も発見者はなく、世界最初の発見であった。

この星に対して、太平洋天文学会はドノホームメダルを贈った。天文月報1978年6月号の“ある発見”にあるメダルの1個である。他の日本天文学会の2個は、1936年10月の射手座新星に贈られたものと、この彗星に贈られた天体発見賞とである。

倉敷天文台は、倉敷市街の南の端で大原農業研究所と道一つをへだてた北側にある。倉敷における生活は単調なものであって、親しく話し合える友人はのちに倉敷新聞の社長になった記者の山本幸男ぐらいのものだったようである。そのころのメモの端に次のように記している。

勉強しましょう、勉強しましょう、そうして勉強しましょう。

夜の天文台は訪れる人とてなく、赤道儀の歯車のまわる音と、視野の中の星はすべてを忘れさず充分であったであろうけれど、雨の夜の夜更けは骨をけずるような淋しいものであった。

1940年の暮ごろになって、自分のこれからの行く道について、深刻に考えるようになっていった。倉敷というところが、若い青春と将来をあずけていいところであろうか——という疑問と解答の自問自答は毎日に深くなって1941年の初めには倉敷を去りたいという希望を山本博士と、原澄治氏に申し出た。

1941年3月30日、妹のカズエさんが倉敷を訪れたとき荷物をすべて送り出して、ガラとした部屋に一人ポツンと座っていた。あらかじめ知らされていないかった妹さんは驚いて顔を見上げたが、にっこり笑うだけであった。翌31日、数少ない倉敷で出来た友人達に送られて倉敷駅を発っていった。そして再び倉敷の土をふむことは遂になかった。

倉敷を引き上げてからの行動はいまのところよく調査がゆきとどいていない、花山天文台へ行き、その後、阿蘇地震研究所に1942年9月から1943年8月までいた様子である。その後また花山天文台に帰った。

1943年はじめ京都大学物理学教室は、スマトラに地質調査に職員を派遣することになった。これに軍属として従軍することになったのである。3月はじめ三宮駅頭から、母と妹に見送られて出発していった。夜であった。どこまで行ったのであろうか、二日ほど経ったとき突然船の都合がつかないのだと帰ってきた。

それから約半月家でブラブラしていた。そしてついに乗船命令がきた、こんどは家人に駅までも送らせなかった。1943年3月中旬の夜のことであった。灘区国玉通り

の家の前で、その二階で新星を観測した家の前で妹を母に手をふって闇に消えていった若者は遂に還って来なかった。

ここで最後にピケリング金メダルのことに一言ふれなければならない。

ここに1937年10月30日付の、山本一清博士からの速達の手紙がある。文面は簡単に、

拝啓、貴君昨年新星発見の件につき、本日米国AAVSO会幹事より金牌贈呈の吉報あり、至急お目にかけたく拙宅まで御出下さい。

金牌は小さな小包にしてとどけられたらしくその包装紙がスクラップ帳に残してある。

金牌そのものは筆者は一度だけ倉敷の部屋で見せていただいた。スマトラへ軍属として出発のまえ、

「お母さんこのメダルは別に僕は持っていないでもいいから“金の供出”に差出して下さい。写真を一枚撮っておいて下さればいいですよ」といっていた。

メダルに対する執着はあまりなかったようだ妹のカズエさんは言う。果してそうであったであろうか、いまは尋ねるすべもない。

1944年3月中旬、岡林滋樹はシンガポールから運命の船に乗った。4月1日の夜半、母タキノは夢にうなされて「たお母さん助けて——」という滋樹の声であった。腰ヒモをほどいて投げたけれど、それが手にとどかずもがきもがき姿は消えていった、はっとして目をさました母はびしょりと汗でぬれていた。ちょうどそのころ阿波丸は台湾沖でしずんでいたのであろう、母の夢は筆者のフィクションではない、実際にその夜母が見た夢であった。

## 雑 報

### 「銀河団の進化」小研究会

1979年2月8日・9日の両日、約30名の参加者をえて、表記の研究会が東京天文台にて開かれた。

銀河自体の研究が、観測・理論の両面で精密化し定量的に体系化されつつあり昨今、個々の銀河と全宇宙の間階層としての天体、銀河団、に関する研究報告が増えてきている。この小研究会は銀河団研究の現状を把握し、今後の研究の方向を探ることを目的に企画された。従ってプログラムも各分野での銀河団研究の総合報告を中心に、いくつかの独自の研究発表を織り込んだ形のように編成された。

1. 銀河団の光学観測——宇宙論的見地より——(寿岳)
2. 局部銀河団とそのメンバーについて(高瀬)
3. 銀河系とマゼラン星雲とマゼラン流(田中(一))